

在日朝鮮人に関する展示の可能性 : 1枚のピラから つなぐ在日100年

著者	藤井 幸之助
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	64
ページ	103-114
発行年	2006-12-28
URL	http://doi.org/10.15021/00001541

在日朝鮮人に関する展示の可能性

1枚のビラからつなぐ在日100年

藤井幸之助

1 はじめに

この100年間に日本と朝鮮の間に何があり、これからどのような関係を築いていくのか。いつも身近な存在だったはずの在日朝鮮人と日本人とがどのように一緒に暮らしてきたのか。日本社会における同化と排外だけではない関係はなかったのか。

2005年は、第2次日韓協約（乙巳保護条約）が締結され、日本が朝鮮（大韓帝国）を保護国化して100年、朝鮮解放60年をむかえる節目の年だった。これは在日朝鮮人100年の歴史とよみかえてもいい。このように長い時間が流れたにもかかわらず、日本においては朝鮮人が民族的なものにふれ、朝鮮人の移住の歴史や現在の状況を学べる公的な機会・場所は充分にはない。

本稿では、前半で日本におけるマイノリティ、特に在日朝鮮人関係のライブラリー・ミュージアムの流れを概観した後、後半で、2004年に国立民族学博物館（以下、みんぱく）で開かれた特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」で筆者が担当した「在日コリアン」コーナーをふりかえり、今後の学びの機会としての在日朝鮮人に関する展示の可能性について考えてみたい。

2 マイノリティのミュージアムは

日本国内にミュージアムは5,000館以上あるといわれるが、マイノリティやその歴史をあつかったものはどれくらいになるのだろうか。

アイヌに関しては、「川村カ子（かね）ト（と）アイヌ記念館」（1916年開館、北海道旭川市）や萱野茂の「二風谷アイヌ資料館」（1972年開館、北海道平取町）をはじめ、公立のミュージアムも少なくない。部落関係では「水平社博物館」（1986年、水平社歴史館として開館、99年改称、奈良県御所市）や堺市舳（への）松（まつ）人権歴史館（2006年再開館、大阪府堺市）があり、在日中国人に関しては「神戸華僑歴史博物館」（1979年開館、2003年再開館、神戸市）がある。日系移民についてはJICAの運営する「海外移住資料館」（横浜市）・「広島市デジタル移民博物館」・「日本ハワイ移民資料館」（山口県大島郡周防大島町）ほか、少なくはない。

在日朝鮮人をテーマとしたコーナーをもつ博物館として、部落問題を展示の中心にし

て、1985年に開館した「(財)リパティおおさか(大阪人権博物館)」がある。2005年末に再開館し、総合展示にコーナー3として「差別を受けている人の主張と活動」の中に「在日コリアン」のコーナーがある¹⁾。大阪府・大阪市が共同で1991年に開設した「(財)ピースおおさか(大阪国際平和センター)」は、「戦争の悲惨さを後世に伝え、平和の尊さを訴えることを基本とする設置理念に基づき、展示、調査研究、講演会の開催などの事業を行って」(ホームページより)いるが、特別に在日朝鮮人のコーナーは設けていない。在日朝鮮人が最も多く暮らす大阪でこの程度である。日本政府や地方自治体には朝鮮植民地支配や戦後補償問題清算の一環としては、在日朝鮮人の歴史などを展示するミュージアムの必要性は少なくとも認識されていない。

3 在日朝鮮人のライブラリー・ミュージアム

アメリカ社会におけるマイノリティの博物館について論じた能登路雅子は、アフリカ系博物館について、次のように指摘している。

エリート白人を主体とする歴史協会や博物館の場合、はじめに収集品があり、そこに建物や寄付組織が加わって展示収集機能が充実していくのが通常であるが、アフリカ系の博物館の場合は、設立当初から黒人青少年のための教育機能をコミュニティから期待され、企画と運営は共通の政治思想で結ばれた活動家が担うケースが多い。主流文化から切り離された草の根の活動として文化保存が行われてきたアフリカ系社会にあって、博物館は次第にコミュニティの必要性を発信する拠点、エスニックの誇りを育てるエンパワーメントのための機関として位置づけられるようになった。それゆえ、博物館の活動の内容も、希少性や金銭的価値の高い芸術品や史料・遺品のコレクションよりは、パフォーマンス、生活文化に密着した展示、学生のための見学やクラスの実施に焦点が置かれてきた(能登路 1999: 191-192)。

在日朝鮮人当事者のとりくみについて見ると、歴史を展示するようなものはほとんどなかった。生活をしながら、戦後もつづく民族差別にたいするさまざまな差別撤廃闘争にあけくれ、あるいはそれを回避するためにさまざまな戦略をたて、また子どもたちを育てるのに精一杯で、今を生きるために過去をふりかえる余裕はなかったからだ。しかし、在日朝鮮人のライブラリー・ミュージアムがあることで、在日朝鮮人は日常生活では出会いにくい同胞に出会い、自らを知る機会に、日本人にとっては日頃存在さえ気づかないでいる隣人を知る機会となる。余裕ができるようになって、少しずつとりくみも見られるようになり、当事者の努力によって、いくつかの朝鮮関係のライブラリー・ミュージアムがつくられてきた。

在日朝鮮人関係ではミュージアムよりライブラリーが先行した。

ライブラリーとしては、図書・資料を集めた「青丘文庫」(1969年開館、1997年神戸市立中央図書館内に再開館、神戸市。故ハンソクキ〔韓哲曦〕)・「錦繡文庫」(1987年

開館、尼崎市。ユンヨンギル〔尹勇吉〕・「文化センター・アリラン」(1992年開館、埼玉県川口市。パクチェイル〔朴載日〕)²⁾などがある。「青丘文庫」では「在日朝鮮人運動史研究会関西支部会」,「文化センター・アリラン」では「民族関係の中の朝鮮民族研究会」などの在日朝鮮人の歴史に関する研究会が行われている。

ミュージアムとしては、鉱山労働の現場を保存し展示する「丹波マンガン記念館」(1989年開館、旧京北町。故リヂョンホ〔李貞鎬〕), 朝鮮美術の「(財)高麗美術館」(1988年開館、京都市北区。故チョンヂョムン〔鄭詔文〕), 古代からの交流の歴史をテーマにした「高麗博物館」(2001年開館、東京都新宿区)などがつくられてきた。

「文化センター・アリラン」の場合は、設立の目的を「多くの人々に対し、朝鮮民族の歴史と文化を紹介し、日本と韓国・朝鮮の相互理解を深めるとともに、地域文化の発展に寄与することを目的とする」としている³⁾。

1965年という早い時期に日本への戦時労働動員について言及した『朝鮮人強制連行の記録』(未来社)で有名な在日朝鮮人歴史家のパクキョンシク〔朴慶植〕の蔵書をベースに「(仮)在日同胞歴史資料館」構想があったが、1998年2月、パクの突然の事故死によって、中断した。後に、滋賀県立大学図書館に膨大な資料・蔵書が移管され、「朴慶植文庫」が開設された。書籍以外にビラやフィルムなどの1次資料が膨大なのと、資料整理のための予算と人員が充分でないために、まだまだ未整理のものが多い。

また、この「(仮)在日同胞歴史資料館」の理念をうけ、2002年、在日本大韓国民団中央本部は滋賀県立大学名誉教授のカンドクサン〔姜徳相〕を委員長に、「(仮)在日同胞歴史資料館資料調査委員会」を立ちあげた。特別展のための共同研究会にスタッフ何人かで参加され、特別展開催期間中にも見学に來られた。当初、ライブラリー的なイメージをもっていた委員会では、特別展を見る中で、モノ展示の重要性に気づかれた。

特別展が縁で、筆者も調査委員として開館まで、企画・資料収集に当たった。2年あまりの準備期間を経て、2005年11月24日に東京都港区の民団中央会館別館内に「在日韓人歴史資料館」を開館し、広く一般に公開した⁴⁾。

「館長あいさつ」で館長のカンドクサン〔姜徳相〕は「所蔵資料は十分とはいえませんが、開館は資料集積の新たな始まりです。来館された方は『こんな物(写真)なら我が家にもある』ことに気付かれると思います。ことばは悪いのですが、『ガラクタ』に歴史性、文化性を付与することも資料館の役割だと思います」(在日韓人歴史資料館2005:1)と述べている。

在日本朝鮮人総聯合会は2004年に「在日朝鮮人歴史研究所」を設立し、前身の在日本朝鮮人聯盟以降の関係資料など、継続して資料を収集している。機関紙『朝鮮新報』でも読者にたびたび資料提供を呼びかけている⁵⁾。

2006年5月には、滋賀県大津市に「渡来人歴史館」が開館した。古代朝鮮からの渡来人に焦点を当て、その後の日朝関係をふまえ、現代に続く関係を知るための施設だ。

NGO「近江渡来人倶楽部」を主催するハビョンチュン〔河炳俊〕が私財を投じて設立したものだ。「高麗博物館」をモデルにして、開設のため準備をしてきたという。これからもさまざまな取り組みが続いていくだろう。

4 誰が、誰に、何を、どのように伝えるか？

みんぱくでは、1977年の開館以来、主に海外の民族学関連資料の収集・保存・展示をおこなってきたが、これまで日本にくらす外国人はあまり対象にせず、資料の収集・保存・展示などはほとんどおこなってこなかった。

2004年の特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」はみんぱくの所蔵品はなく、当事者からの借り物で展示の構成をしたということが大きな特徴だ。「人々のくらし」に重点をあて、多くの在日外国人が日本に暮らしていること（多民族化する日本）を生活用品などのモノ資料を中心にして展示しようとしたものである。展示は特別展の会期中にかぎられ、会期が終われば展示品のほとんどすべては返却された。

「在日コリアン」コーナーを担当したのは、キムミソン〔金美善〕・前田達朗・島村恭則・藤井幸之助の4人であった。担当者在日朝鮮人が一人もいないことは当初から指摘されていた。しかし、多くの在日朝鮮人が協力者（ソンシルソン〔宋実成〕ほか）としてかかわっていただくことで客観的に描くという立場をとった。それぞれの得意とする分野で展示を構成することにし、展示にあたっては、モノの所有者・使用者の顔となまえのわかるものにしたというのが全体の一致した考えだった。担当の分担はおおざっぱにはしたものの、重なる部分も多く、収集活動は難航した。

筆者たちは類似の展示がない中、朝鮮人が日本で生きてきた100年をどうすれば表現できるか、生活・労働に密着したモノを五里霧中で探しはじめた。まずは人に伝えなければならないと考え、見出しに朝鮮文字をいれた1枚のビラを配ることから始めた。京阪神各地で開かれる民族まつり／マダン⁶⁾には必ず行き、ビラまきをした。

在日朝鮮人の二大民族団体である在日本朝鮮人総联合会大阪府本部・在日本大韓国民団大阪地方本部には直接、協力要請に行き、支部単位でのビラの配布もお願いした。

展示開始までに1万枚以上は配っただろうか（特別展開催の宣伝も兼ねていた）。しかし、これまでのネットワークを中心にあちこち声をかけたが、なかなかモノは集まらなかった。展示のイメージをうまく伝えられなかったということもあるだろう。しかし、普段は意識しなかったり、見過ごされていたことの中から、1枚のビラによって、意識しないでいたことに気づき、そこに人びとの営みや歴史についての新たな認識が生じることもあるだろう。

たとえば、2003年6月に大阪城公園太陽の広場で開かれた「大阪ハナ・マトゥリ」でビラをうけとった奈良県天理市立北中学校夜間学級の福島先生からはわざわざ連絡を



図1 資料提供をよびかけて配付したビラ（この後、何回かバージョンアップしたビラをつくり、配布した）作成：藤井幸之助

いただき、大変貴重な地域史料をお借りできた。この方の場合、それまでも意識的に教室前の廊下を利用して、朝鮮での生活を思い出させる生活用品や地域関連の収集物を展示し、在日朝鮮人一世がそれらを見ながら、学習をすすめるとりくみをおこなってきたこととビラがむすびついたといえる。

5 展示品を一から集めるという試み

植民地期に朝鮮から渡ってきた一世の多くが、今、人生の最後のステージをむかえつつある。そんな中で、2004年・2005年は一世を描いたドキュメンタリー映画・写真集が豊作の年であった。

『花はんめ』（キムソンウン〔金聖雄〕監督）・『HARUKO ハルコ』（野澤和之監督）⁷⁾・『海女のリャンさん—日本・韓国・北朝鮮に離散した家族の絆を守りぬいた母の物語—』（原村政樹監督）である。いずれも秀作揃い。キムソンウン監督は映画撮影の直前に一世のお母さんを亡くし、自分の母を撮るように撮ったという。写真集では菊池和子写真・文『チマ・チョゴリの詩が聞こえる』（小学館）⁸⁾・リブンオン〔李朋彦〕写真・文『在日一世』（リトルモア）がある。

筆者が資料収集のために直接お願いした何人かの人には「ついこないだ一世の母が亡くなって、遺品を処分した」「引越して捨ててしまった」「そんなガラクタをいつまで

も置いておけない」といわれた。ある人の母親がキムチ売りをして、一家をささえてきた乳母車を改造した手押し車は、一世が亡くなったのちもしばらく残されていたが、家の整理とともに捨て去られた。さまざまな事情で、一カ所にじっとしていない人が多く、引っ越しのたびにものを捨てていくため、当座の生活に必要なモノは捨てられた。失われたモノは数知れないだろう。

しかし、ある所にはあるものだ。渡航証明書とともに日本へ渡る前に撮影したアポゾの写真など、かさばらないモノはひとくくりにして残されていた。メンバーは在日朝鮮人との個人的なネットワークを経て、さまざまなモノの存在にたどりついていった。こうして、オープニングまでにさまざまモノが集まった。特に女性たちが日常の生活で、労働の場でつかった品々が多かった。祖国の味をだすために改良された日本製の鍋や釜。家族の汚れ物をまとめて洗った洗濯棒。あまたのチョゴリや洋服を縫ったであろう足踏みミシンなど。これらは、渡日以来、一世の女性たちが家計を支え、子どもに教育を受けさせるために身を削って生きてきた証ともいえる。1階の「エスニックショップ」のコーナーでは、猪飼野朝鮮市場の店舗を再現した。

「ただ並べただけ」「高校の文化祭展示のようだ」という見学者の感想も少なくなかった。展示するモノとモノの関係性の検討が不十分だったことはいなめない。ここでは1例をあげておく。

2002年9月の日朝首脳会談でキムジョンイル〔金正日〕国防委員長によって明らか



写真1 日々の生活の中で使われた道具類 撮影：藤井幸之助



写真2 猪飼野朝鮮市場に今もある南原商店をモデルに再現した店舗 撮影：藤井幸之助



写真3 左が第1制服のチマ・チョゴリ, 右が第2制服 撮影：藤井幸之助

にされた、日本人拉致により、直接関係のない朝鮮学校に通う女子生徒たちが、通学途中に暴行・暴言などを受けた事件があった。これを一カ所で展示するのではなく、何か所かに分散した。2階のコーナーでは従来の民族服（チマ・チョゴリ）の第1制服に加えて、ブレザー・スカートの第2制服を展示した。1階の「外国人差別」のコーナーでも詳しくふれたり、第二東京弁護士会が作成し、都内の鉄道各社内で広く掲示されたポスター「なぜ、在日コリアンの子どもたちが嫌がらせを受けるのでしょうか」を展示したりしたが、これらが有機的に見学者に伝わったかという点に心許ない。モノに語りせよとするあまり、キャプションの文字数が少ないとか文字が小さいなどの問題も克服されなければならない。

6 ビラ・チラシも展示

「ビラは歴史をつくり、歴史を記録する。片々たる紙片に凝縮されたメッセージによって世界の断片を照らし出し、ひとびとが歴史に参加する道を切り拓かなければならない」（鎌田 1981：26）。

展示場では、コーナーの最後にできた大きな壁の裏面を利用して、「在日コリアン掲示板」として、筆者がこの20年間収集してきた在日朝鮮人関連の公演・集会・コンサート・映画・個展など、大小65枚のビラ・チラシ・ポストカード・ポスターをキャプションなしで貼りだした。掲示板の効果をねらって、マスキングテープで仮止めにした。見学者の多くはこれらを見て、これからの催しかと思ったようである。「なんだ、もう終わってるじゃないか」（中にはこれからのものもあるにはあった）。ビラ・チラシ・ポスターなどは通常、催しや集会などが終わってしまえば捨てられる運命にある。しかし、そうであるがゆえに、発信者はその時々を思いを凝縮させて、参加を呼びかけているのだ。

ビラやチラシの効果は受け取った人、見た人いかんによる。さまざまな情報をうけつつも、取捨選択しつつ、口コミで伝えることにより次の人に伝えられる。必要な情報が必要な人に届いたとき、効果が発揮される。たとえば、中学校夜間学級（夜間中学）のビラなど、文字を読めない人にとっては情報に到達すること自体がむずかしい。近くの人が「こんなあるよ」と伝えることで文字をしるきっかけとなる。

ある時、掲示板の前で、大学院のゼミ生を引率する教員が「関西にはこんなにもたくさんのお在日朝鮮人関連の催しがあるんですよ。まずはそれを知ることです」と解説していた。展示の趣旨を理解してくれたようでうれしかった。

過去にさかのぼって、ビラ・チラシ・ポスターのたぐいを収集することはかなり困難だ。しかし、これからのものについては、意識的にスクラップして保存していくことは可能だ。催しの主催者や演じ手の思いを1枚のビラ・チラシからくみとっていくことも



写真4 「在日コリアン掲示板」をみる見学者 撮影：藤井幸之助

また、歴史を読み解くために大切な作業となるのではないだろうか。

7 ひとのつくる展示

モノの展示以外に、今回の特別展ではひとのつくる展示ともいうべき、さまざまなとりくみがおこなわれた。当事者の生き生きした姿を直接見学者に伝えようというものである。土・日の週末や祝日には、展示担当者や関係者によるギャラリートークのほか、ワークショップや公演などを精力的に企画した。

「こどもワークショップ」としてチェギづくり（足で蹴る羽）（金剛学園小学校教員）、朝鮮文字によるネームプレートづくり（大和高田ケグリ子ども会キムガンヂャ〔金康子〕）などをしていただいた。歌や楽器演奏、伝統舞踊、演劇などは、リチョンミ〔李政美〕、白頭学院建国小・中・高校（プンムルクラブ、吹奏楽部、伝統芸術部）、みのおチャンゴヨロガヂ、池田市立呉服小学校母国語学級、キムイルヂ〔金一志〕民族舞踊芸術団、セッパラム劇団などの協力をえた。

「四天王寺ワツソ」には、渡来人を乗せてきた舟を模した「舟だんじり」を借る予定であったが、トレーラーでの移送費だけでも相当な費用になることがわかり断念した。その代わりというわけではないが、2003年秋の本番が雨天中止になったため、出演者のために発表の場をということで、みんぱく玄関前の広場でミニワツソ巡行となった。

いずれのグループも展示の趣旨と意義を理解していただき、素晴らしい舞台となった。

また、展示場では、在日朝鮮人アーティスト(故ホンヨンウン[洪榮雄]、チョバク[趙博]、チョンソヘン／かわにしきょう [川西杏]、リジョンミ [李政美]、Pushim)のライブ演奏の様子や、強制労働の現場であったタチソ(高槻地下倉庫)を証言などでまとめたドキュメンタリーの映像を上映することによって、見学者の聴覚に訴える工夫もした。

会期中、3万6,880人の観覧者があったが、小・中学生は1万2,305人と、全体の3分の1をしめた。子どもたちの参加が多かったのも特徴のひとつとなった。しかも、その当事者の在日朝鮮人の子どもたちがたくさん来てくれた。朝鮮学校や韓国学園などの民族学校や日本学校の民族学級や中学校夜間学級(夜間中学校)などからの団体鑑賞が多かった。

8 おわりにかえて

これまで見てきたように、日本における在日朝鮮人に関する展示施設、特にモノを展示するミュージアムの必要性がいくらか明らかになったと思う。

日本社会の中で在日朝鮮人社会も少子・高齢社会をむかえ、在日朝鮮人の歴史をどう伝えていくかは、在日朝鮮人のみならず、日本人にも課せられた大きな課題となる。今後、ますます関連の常設展・常設館が必要になってくるが、その際には特別展での「在日コリアン」コーナーの経験が参考となるだろう⁹⁾。

また、そこには資料やモノだけでなく、一世の語り部がいて、三・四世や日本人の若い世代に直接語りかけるコーナーをおくことも必要だ。今回の展示では、一世に対しておこなった聞き取りを充分にいかせなかった。今後も継続して聞き取りをするとともに、提示の仕方〔文字化・映像編集〕も検討していかなければならない。

注

- 1) 「差別を受けている人の主張」のコーナーは、「在日コリアン」「ウチナアンチュ」「アイヌ民族」「女性」「性的少数者」「障害者」「HIV感染者・AIDS患者」「ハンセン病回復者」「ホームレス」「被差別部落」「公害被害者」「水俣病患者」からなっている。
- 2) 「青丘」「錦繡」は朝鮮をさす雅称で、「アリラン」は代表的な民謡の名称。朝鮮を象徴することばでライブラリーの命名をおこなっている。
- 3) 経緯は次の通りである。「1987年、新宿歌舞伎町に「近現代史研究所準備室」を設置し、朝鮮近代史資料の収集と整理を行いながら、「文化センター・アリラン」の開館に向けた準備作業を始める。1989年8月から川口市仲町で会館設立工事を開始し、1991年4月竣工した。建物

完成時に本格的な会館準備作業に入り、1992年11月に文化センター・アリランを開館した。さらに、2000年2月特定非営利活動法人文化センター・アリランとして、NPO法人化した。」同館2003年度のデータによると、約500万円の総収入のうち、会費56%・寄付金18%・事業収入1%・補助金・助成金・委託金0%（うち、政府・自治体・民間0%）となっている。いずれもホームページより。

- 4) 民団中央は傘下の団員・諸団体から2,000万円以上の寄付を集めたという。
- 5) 「在日朝鮮人歴史研究所の呉亨鎮所長に聞く 在日朝鮮人の歴史資料の収集事業をさらに拡大」『朝鮮新報』2006年2月23日、「在日朝鮮人歴史研究所設立から1年5カ月 記念出版物発行、5000余の資料集める 資料収集に力注ぐ」『朝鮮新報』2006年2月25日。公開・非公開は不明。
- 6) ふれあい芦屋マダン2005実行委員会（2005）を参照のこと。
- 7) この映画の中で、今回の特別展の資料収集協力の呼びかけのためにつくったピラが一瞬写るシーン（滋賀県立大学河かおる研究室）がある。人の手によって届けられたわけだ。
- 8) 「在日コリアン」コーナーでは本書に収められた菊池和子さんの写真を何点か使わせていただいた。
- 9) 現状では、日本政府や地方自治体による独自の施設の新たな開設を期待することはむずかしい。しかし、既成の施設に在日朝鮮人関連の展示を盛り込んでいくことや、民間のミュージアムには補助金や助成金などの給付の働きかけもおこなっていかねばならない。

文献

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

鎌田 慧

1981 『ピラの精神』東京：晶文社。

庄司博史編

2004 『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団。

高麗博物館編

2002 『市民がつくる日本・コリア交流の歴史』東京：明石書店。

在日韓人歴史資料館

2005 『100年のあかし—在日韓人歴史資料館開設記念—』在日韓人歴史資料館。

在日コリアン歴史資料館調査委員会（仮）

2003-05 『調査委員会ニュース』第1～8号。

在日同胞歴史資料館設立準備委員会

1996 『在日同胞歴史資料館設立の呼びかけ』。

1996-97 『会報』第1～5号。

ふれあい芦屋マダン2005実行委員会

2005 「報告まちづくりマダン大交流会」『阪神・淡路大震災10周年記念事業 ふれあい芦屋マダン2005報告集 ひと・まち・マダン・芦屋—多文化共生のまちづくり—』、29-91頁。

パクキョング〔朴 景久〕

2004 「未来見すえた価値観の共有へ 同胞史ブームを巻き起こしたい」『アプロ21』2月号（通巻76号）：14-20。

能登路雅子

1999 「歴史展示をめぐる多文化ポリティクス」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ 揺らぐナショナル・アイデンティティ』（アメリカ研究叢書）東京：東京大学出版会，191-192頁。

朝鮮関係ライブラリー・ミュージアムのウェブサイト（設立年順）

青丘文庫（1969年）

<http://www.ksyc.jp/sb/>

（財）リバティおおさか（大阪人権博物館）（1985年）

<http://www.liberty.or.jp/>

錦繡文庫（1987年）

http://www.library.pref.hyogo.jp/guide/library_80.html

（財）高麗美術館（1988年）

<http://www.koryomuseum.or.jp/>

NPO法人 丹波マンガン記念館（1989年）

<http://www6.ocn.ne.jp/~tanbamn/>

NPO法人 文化センター・アリラン（1992年）

http://www.pref.saitama.lg.jp/A02/BQ00/ngo/center/cen_kawaguti_bunka_ariran.html

パクキョンシク〔朴慶植〕文庫（滋賀県立大学図書館）

<http://www.shc.usp.ac.jp/kawa/park/index.htm>

NPO法人 高麗博物館（2001年）

<http://www.40net.jp/~kourai/>

NPO法人 在日韓人歴史資料館（2005年）

<http://www.j-koreans.org/>

渡来人歴史館（2006年）

<http://www.t-rekisikan.com/>

【注記】本稿では人名に敬称を略した。また，朝鮮人のなまえを表記する際に，朝鮮漢字音をカタカナで記し，〔 〕内には漢字表記をした。